

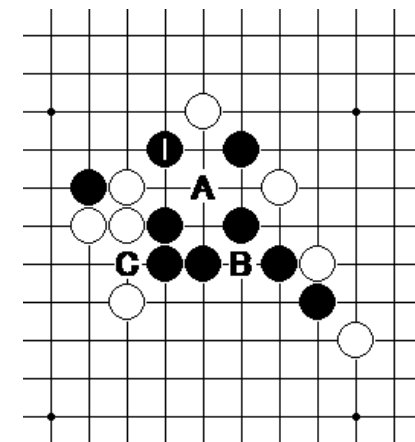
連珠っておもしろい

九段 河村典彦

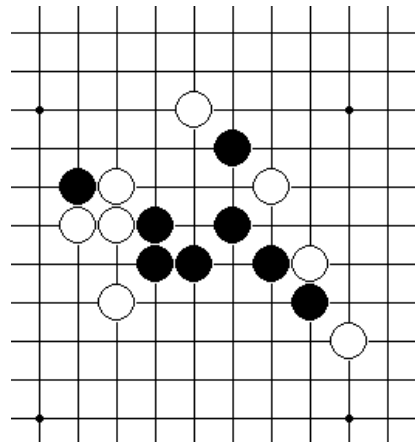
● 第124回 ●

■ 詰連珠ドリル

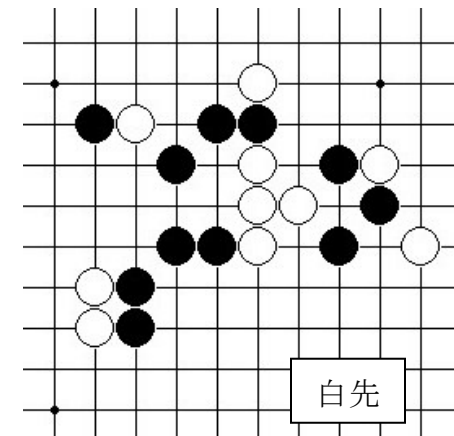
ここ数年ずっと詰連珠を作ってきた、珠友や連珠社ホームページに掲載してきた。千木良さんの普及活動の一環で詰連珠をドリル化しておく子供に食いつきがいいことが分かった。そこで詰連珠をドリル化してプリント形式で作っておいたのだが、やはり製本化した方が広まりやすい、と言うことで、100問ずつ問題集として作ることにした。まずは一手四三の入門編から作り始めたのだが、一手四三となると結構簡単に作る事ができる。



ノリ手になるのが2か所、四々が絡むのが1か所、正解は1つだけである。そして正解は一番わからなくしている。この例では、A、



である。(黒先)



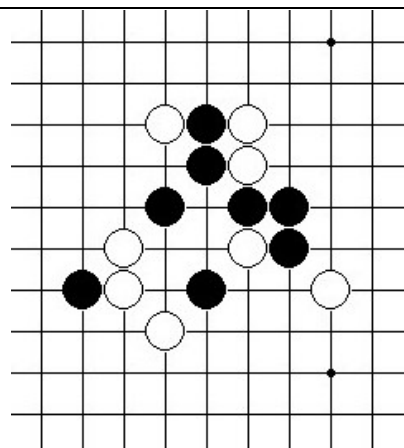
Bがノリ手、CがAの四々が絡んで勝てない、という罫にしている。正解は1と言うことになる。

このドリルを通じて、

- ・ ノリ手の事例
- ・ 四々は打てない
- ・ トビ四、トビ三の四三を学ぶことができる。

この一手詰めは作っていくとどんどん難しいものを作りたくなり、ついには入門編とは言えない問題まで作るようになった。その例を見てもらおう。解答は一番最後に示しておく。

ぱつと見て四々があるが、ここが打てないということ。ここが打てないという事を学ぶ目的もある。四々の焦点に白が入ると三ができるため、四を伸びてからの三は打てない。三、四三と言うことは、この2つの四



この詰連珠ドリルだが、

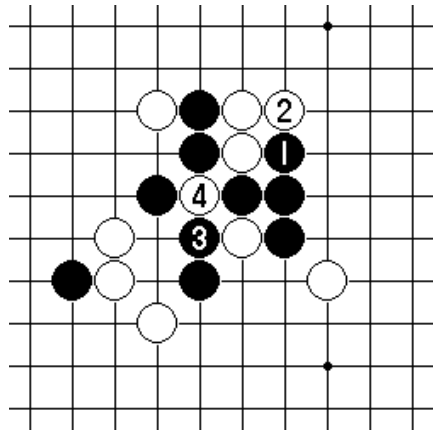
- ・ 入門編を2冊
- ・ 初級編を2冊
- ・ 中級編を2冊

合計6冊完成している。

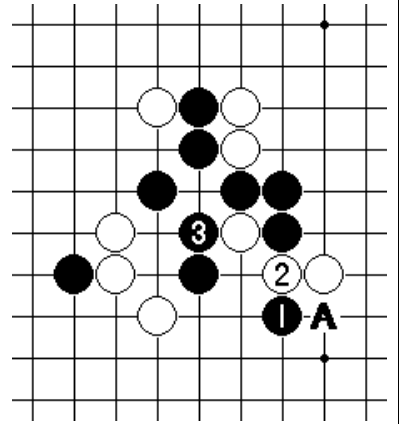
1冊には100問あり、黒先70問、白先30問となっている。

初級編は三、四三が基本となっている。その問題を紹介しよう。(黒先)

のどちらかを四々でない場所
 で四三にすることになる。
 となると、次の図が浮かぶ。



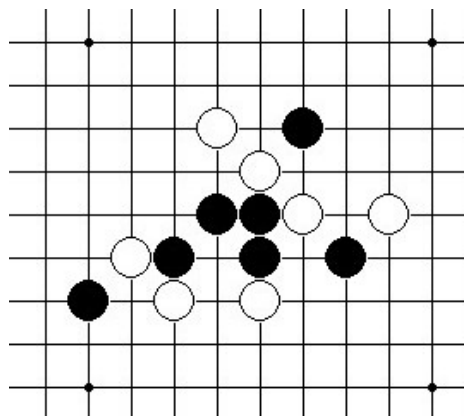
黒1、3で四三のようだが、
 白4でノリ手になり、これは
 失敗となる。ここま
 で失敗して最後に正解にた
 どり着くのが理想だが、あ
 まり難しくするとあきらめ
 てしまう可能性があるの
 で注意が必要である。
 正解はこちらにトビ三を
 打つ手である。この手を打
 つことによりノリ手になる
 石を打たれずに済むので勝
 ちになる。



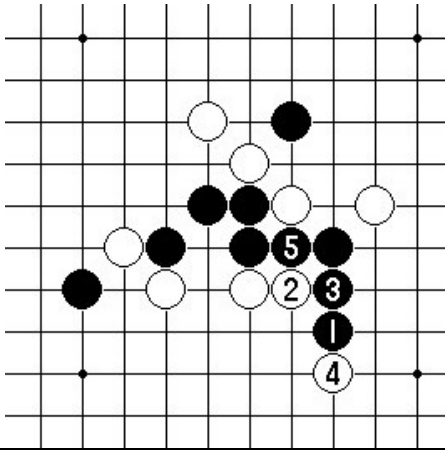
問題によつては白Aに白
 石を置いてこちらを罠にす
 ることもできる。なので、
 基本図を一つ決めれば派生
 の問題をいくつも作ること
 が可能となる。

次に中級編を紹介しよう。
 中級編になると三・三・四
 三が基本線となるため、余
 詰めにも注意が必要となる。
 問題のパターンも複雑にな
 ってくるため、結構作るの
 に時間がかかる。
 では、例を見てみよう。
 詰連珠を作る時は最後の四
 三になる剣先が必要なので、
 通常は剣先を先に作ってか
 らそれをつなげるようにし

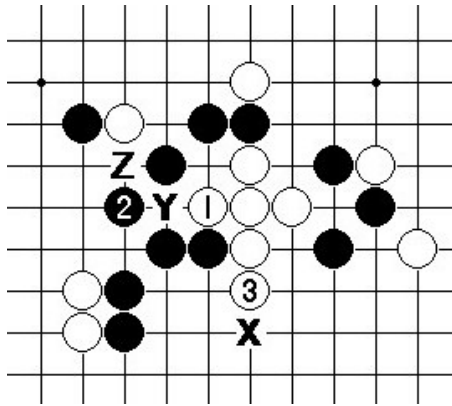
ている。



斜めの三をどういう形で
 引くかが問題であり、心理
 的な罠を仕掛けています。



正解は黒1とトビ三で打
 つ手になる。白2とノリ手
 を打たれても黒3と押さ
 える手があつて勝ちとなる。
 ノリ手があつて黒1と飛び
 出しにくいのでそこが罠に
 なっている。
 では、最後に一手詰めの
 解答を見てみよう。



白1と打つてY点の三々
 禁を狙うが、黒2で斜めの
 連がZ点四々で逃れている。
 しかしその石を利用して白
 3と打てばX点が三々禁と
 なる。これはかなり難しい
 一手詰めだろう。